25 杉戸宿～幸手宿

埼玉県杉戸町

杉戸宿 ～ 杉戸高野台

（歩行距離 1888m 24分）

歩く地図でたどる日光街道
http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp

11 茨島一里塚

日本橋から11里の一里塚。茨島一里塚は、杉戸宿と幸手宿との中間に位置し、塚の上には榎が植えられてあった。「山田うどん」の敷地内角に案内板がある。

⑥東武鉄道杉戸高野台駅

鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」に、下河辺行平・政義が古河・高野の渡しを固め敗走する兵を討つと記されており、これが「高野」という地名の初見だと思われる。のち明治22年（1889）に4ヵ村を合併して高野村としました。明治32年（1899）以来、永年にわたって親しまれてきた旧杉戸駅と、地名の高野を組み合わせて名付けられた。

幸手の歴史

約8000～6000年前の縄文時代、今の低地は海底でしたが、槇野地の台地では狩猟や採集による生活が営まれていた。縄文時代の終わり頃には気候が寒冷化にむかい、海が湿地に変わり、弥生時代に移っていった。

高野永福寺の由来を記した龍燈伝記によると、弥生時代後期の約1800年前に、日本武尊が「薩手が島」に上陸し、田宮の雷電神社に建御雷の神を祀ったことが「さって」の呼び名の由来とされている。

江戸時代、日光道中6番目の宿場が置かれ、日光御成街道が合流し、筑波道が分岐する宿場町として栄えた。利根川の付け替え工事が行われ、権現堂川・江戸川を中心とした舟運が盛んになり、権現堂や関宿の河岸には回船問屋が立ち並ぶようになった。河川の改修によって新田開発も進み、農業が発展した。

杉戸宿　旅籠屋と飯盛旅籠

旅籠とは庶民が宿泊に利用した旅館で、杉戸宿には脇本陣を兼ねた旅籠屋2軒を加え48軒の旅籠屋があった。杉戸宿の旅籠屋に泊まったのは、一般の旅人や大名の家臣だけでなく、杉戸在住の村人も助郷役で杉戸に来たとき、旅籠に泊まることがありました。この旅籠の多くは飯盛旅籠で、一般的な旅館（平旅館）とは異なり、遊女行為を行っていた旅籠のことをいう。遊女は1軒に2名までは認められていたが、実際は多くの飯盛女を雇っていた。彼女らの出身は越後国が多かった。

④西行法師見返りの松碑

この道を西に行くと永福寺というお寺があり、そこに西行法師見返りの松がある。歌人としても知られる西行法師は、文治年間(1185～1190)、奈良東大寺再興歓進のため奥州平泉の藤原氏を訪れる旅に出ましたが、途中、病に倒れ、下高野にあった小庵(後の東大寺)で手厚い看護を受けます。

無事に回復し、再び平泉への旅に戻った西行法師は、小庵を離れる際、庭にあったみごとな枝ぶりの松を何度も振り返りながら出発したといわれ、いつしかこの松は「見返りの松」と呼ばれるようになった。大島交差点から1693m　21分。

追分

追分は道が二つに分かれる場所。もとは「馬を追い、分ける場所」を意味したが、そこから街道の分岐点も意味するようになった。また、そこから派生して、こうした地名を冠にした日本の民謡の一種(追分節)の略称として用いられることもある。日光街道の主な追分は、小渕の追分(埼玉県春日部市)、幸手の追分(埼玉県幸手市)、喜沢の追分(栃木県小山市)、追分地蔵(日光市今市)などがあります。

③高野の渡し

鎌倉時代から戦国時代にかけて、幸手は交通の要衝になりました。

吾妻鏡によれば、高野の渡しが奥州への重要な拠点とされ、ここを通る鎌倉街道(中の道)は軍事・交易上重要な道となっていた。高野の渡は、大島の交差点から1221m　15分で現在の下高野の大落古利根川に架かる満願寺橋付近だといわれています。

大島新田の開発と大島清兵衛

江戸時代の中頃になると幕府の財政は苦しくなり、八代将軍の徳川吉宗は、年貢の収入を増やすことにより財政の建て直しを図るために、各地で積極的な新田開発を進めた。

しかし、新田開発を行えるような地域は、江戸時代の初期に概ね終わっており、この時代には開発に多額の費用を要する沼地の干拓などにが多かった。大島新田も、かつては安戸沼とか倉松沼と呼ばれた広大な沼地でした。

この新田開発は江戸の柳橋の商人大島清兵衛だった。清兵衛は、付廻堀の開削、囲堤、掘上げ田、排水路の伏越しなどの特殊な技法により沼地の開発に成功した。

後に彼の名をとり、大島新田と呼ばれた。

清兵衛は、元文3年（1738）に亡くなり、50回忌の天明7年（1787）に墓標を建て、村民がその偉功を偲んで冥福を祈りました。その後も6月8日(現在は7月8日)の命日には、「清兵衛八日」という行事が行われている。

眼病ご利益の寺

元禄4年（1691）、村民の母親が目を患い視力を失ってしまいます。子どもは21日間寺院を訪れ全快を祈願します。満願の夜、子は夢を見ます。本尊があらわれ、母親の目をとり、代わりに白い球を入れる夢でした。すると翌朝、母の病は治り、一生目は不自由しなかったといいます。来迎院が眼病ご利益の寺として伝えられるゆえんです。

大名や日光門主の通行

参勤交代や日光東照宮への代参のため杉戸宿を多くの大名が通行した。特に日光道中は関東や東北地方の多くの大名が利用した。参勤交代は将軍が、それぞれの大名に参勤する時期を決め、特に4月は外様大名の多くが参勤する月だった。毎年、2月、4月、5月、6月、8月は多くの大名が杉戸宿に宿泊し宿場に活気があふれていた。

杉戸宿には秋田藩佐竹氏、仙台藩伊達氏、会津藩松平氏、森岡藩南部氏、米澤藩上杉氏、弘前藩津軽氏などの大名の参勤交代。萬家喜連川氏（古河公方家末裔）のような年頭のあいさつで江戸に出向くほか、幕府、役人、日光門主、日光例幣使、日光代参大名などの日光東照宮関係の通行者も多かった。

幸手市に入る

山田うどんの角に茨島の一里塚碑

名主藤城家
茅葺きの大農家。藤城家の古文書は埼玉県文書館に寄託している。

稲荷神社と恭倹舎

⑤恭倹舎

天明5年（1785）に大島村に戻った大島有隣と関口保宣は、名主藤城吉右衛門との3人で恭倹舎(心学普及のための施設)を設立し、心学の普及と庶民教育に努めた。

ここで、大島村をはじめとする一般民衆の多くの人々が心学を学びました。

有隣の後、弟子でもあった子の有斎が引き継いで、恭倹舎での心学普及を通した教化にあたった。

またその後も、大島地区の恭倹舎講として昭和21、22年頃まで活動は存続していた。

恭倹舎は天明5年設立以来、築220年以上経っているが、保存会の人々によって現在も集会所として維持されている。

有隣のお墓は下高野の永福寺にある。また、有隣塚は恭倹者をさらに奥に進むとある

「松並木、今は切りつくして なし、旧松原と云ふ」（上野・下野道の記）明治時代には松原はなくなっていた。

厳島神社

②厳島神社

小さな朱塗りの神社はよく目立つ。境内には小さな池が作られている。

また、鳥居脇にある石橋大膳堀は嘉永2年（1849）建立。正面に石橋　志　江戸新吉原町松島屋杉戸屋。左側面には世話人2名。杉戸宿出身の江戸大店が地元の厳島神社に神橋（石橋）を寄進したといわれ、塔の脇には石橋の欄干と桁と思われる石材がある。

①八幡神社

「土橋を渡りて往けば八幡の社あり」（上野・下野道の記）新与左衛門橋を渡ると八幡神社があった。

柳の大樹ばかりというが左右には田園風景が広がっている